

Muse
Talk

ミューズトーク

民族音楽を通して、
響きあうところの音色を伝える

楽器は大切な友たち、多文化との共生を考える
ウメトバエワ・カリマンさん

輝業家交差点

近代につぼみを彩る人物往来

相馬 黒光

アンビシャス

時代を照らす「大志」と「真心」という光

逸品に込められた歴史と文学と芸術の味わい

法政大学人間環境学部教授 湯澤 規子

《里山の逸品》養殖真珠、切り出し七輪、宮古上布

民族音楽を通して、響きあう人々の音色を伝える

— 楽器は大切な友たち、多文化との共生を考える —

ウメトバエワ・カリマンさん



ウメトバエワ・カリマン

クルグズ共和国出身。民族音楽学研究者。三弦楽器のコムズ、金属口琴、木製口琴などの演奏家。2007年東京芸術大学音楽研究科に入学、10年修士課程を修了（アイヌの竹口琴・ムックリ研究による）。その後、博士課程へ進み、14年博士号取得（クルグズ伝統楽器コムズ研究による）。

民族楽器コムズは クルグズ人にとって 大切な友たち

「クルグズ」については、まず国の名前の説明が必要ですね。いまでも日本ではキルギスが使われていますが、国の正式な名称はクルグズ共和国です。旧ソビエト連邦を構成していたのでロシア語の発音である「キルギス」が使われていましたが、本来の母語としての発音は「クルグズ」なのです。

コムズは「楽器」を意味する古いことばで、シャーマンが使っていた道具あるいは楽器そのものを指していたと言われています。コムズはアンスの木をくりぬいて作られ、ネック部からボディまで一体でできています。遊牧民たちの楽器らしく、軽くて持ち運びしやすいです。弦は3本で真ん中が高い音になっているのが特徴で、とても珍しい調弦です。

私は楽器にお守りをつけています。クルグズでは初めて乗る馬の口に轡をかませるとき、持ち主が「(馬に)私の友たち、これからよろしく」という願いをこめてお守りをつけます。楽器のお守りも同じ意味で、私のコムズを守ってくれています。クルグズの人たちは楽器を友たちのように大切に思っているのです。

旧ソ連体制の崩壊 未知の国、日本

生まれは首都のビシュケクです。父は家具を作る工場で働き、母は洋服を仕立てる仕事をしていました。私は5人兄弟の一番下で、コムズと出会ったのは8歳のとき。12歳上の姉に勧められてコムズを習うクラブに行き、はまってしまいました。特にきれいな音色が好きです。それから1年後に児童音楽学校へ入りました。そこは普通の学校が終わってから通う、音楽の基礎を教える学校です。義務教育を終えた後に国立音楽大学に入りました。大学在学中に教員として子どもたちにコムズを教え始め、卒業した後もそのまま教員として働いていました。

25歳くらいのときに、地元で日本語を勉強している人に出会いました。ちょうど旧ソ連が崩壊した頃で経済的にも大変なときでした。教員は給料がすごく少なくて、これで生きていけるのだろうかを悩んでいた。音楽以外の全然違うことをやりたい」と話したところ、「日本語を勉強してみれば？」と言われました。しかし、そのときは「えっ、なぜ日本語なの?」。日本はすごく遠いところだと思っていましたし、日本という国を意識することもあり

ませんでしたから。

ただ、ビシケクにはキルギス日本センターというJICAの現地人材開発機関があつて、試験に受かったら無料で日本語を勉強させてくれると聞き、軽い気持ちで受けたら、入ることができました。母には「結婚して落ち着きなさい」と、すごく怒られましたね。

日本語を学ぼうと、音楽と日本を結びつけられないかと考えて留学したいと思うようになったていきました。民族音楽国際会議でお会いした日本人の方から東京芸術大学の先生を紹介していただき、文部省の国費留学生の試験を3回目で受かり、33歳で芸大研究生として来日しました。

旧ソ連とクルグズの音楽 楽器から見える 国や文化の素顔

クルグズは旧ソ連の影響をとて強く受けていて、民族楽器もこの時代に大きく変わりました。私も博士論文でクルグズの民族楽器がどう改良されたかを調査研究しました。クルグズの人たちのなかには、



土の笛という意味のチョボチョールは、クルグズの民族楽器の一つ



手や楽器を踏るように動かして曲を表現するのがコムズの演奏スタイル

旧ソ連時代による変化を悪く言う人もいますが、私はいいこともたくさんあったと考えています。博士論文を書くときに悩みましたが、私は「改良」という言葉を使いました。

ほとんどが遊牧民だったころの伝統的なクルグズの楽器は、例えば夜、家族や友だちが集まってコムズを弾く、あるいは1人で弾くもので、大勢の前で演奏することはありませんでした。旧ソ連時代には楽器そのものが改良され、アンサンブルが演奏できるようなったのです。コムズもバス・コムズからピッコロ・コムズまで家族ができ、オーケストラでの演奏も可能になりました。さらに楽譜の読み書きができるようになりまし。クルグズ人は即興演奏をほぼ失ってしまいましたが、その代わりにアンサンブルができるようになったのです。現在もコムズは、伝統的なコムズと改良されたコムズの2種類があります。

他の中央アジアの国々も旧ソ連から影

響を受けています。ただ、それがどういうものかは国によって違うでしょう。近隣だから同じ、旧ソ連だから同じではありません。いま、私はクルグズの隣国であるカザフスタンの音楽文化の研究をしていて、ドムブラーという二弦楽器を習っているのですが、コムズと似ていると軽い気持ちで始めたら、全然違う楽器でした。楽器に対する文化や位置づけも含め、習ったからこそ見える文化があります。日本の琴や三味線も、すごく特別ですね。誰もが触れられるものではないし、子どもが習いたいと言つても、もしかしたら親は悩むかもしれません。いまの日本が抱える社会的、文化的な状況との関係も見えてくるでしょう。

私はこれからも民族音楽学の研究者として生きていくつもりです。2020年の春から大学院生に直接教えることになっていますが、少しでも多くの人に民族音楽を通して多文化との共生、そして響きあうところの音色を伝えていきたいと思っています。

輝業家交差点

近代にっぽんを彩る人物往来



相馬 黒光

時代を照らす

「天志」と「真心」という光

逸品に込められた

歴史と文学と芸術の味わい

法政大学人間環境学部教授 湯澤 規子



写真提供・協力 株式会社中村屋

「新宿中村屋」と相馬黒光

私はこれまで二度、相馬黒光に出会っている。

一度目は高校生の時である。英語の先生がノートと一緒に抱えていた四角い缶箱を差し出し、「この人を知っていますか」と問うた。箱には「黒光」と書かれていたように記憶している。彼女は何となく物思いに耽りながら、それが新宿中村屋と所縁の深い女性の名であることだけを示すと、静かに教室から出て行った。文学的芳香漂う「黒光」という名と、「新宿中村屋」という老舗企業の背景に垣間見えた歴史の断片が、十七歳の私に深い印象を残した。

二度目は黒光が齢六十の時に著した自伝『黙移』を読んだ時である。この時私は既に結婚し、仕事を続けながら子どもを育てていたこともあって、黒光という一人の女性が好奇心旺盛な少女から母となり、新宿中村屋の女主人、若い店員たちの母代わり、そして国内外の芸術家や活動家たちの良き理解者として明治・大正・昭和を駆け抜けるように生き抜く姿に、時代を超えて胸打たれるものがあつた。『黙移』というタイトルは、末文にある「私の道はただただすぐに、声もなく、移つてここに来た

ことを思います(相馬黒光『黙移』法政大学出版局、一九六一年、二二六頁)」という一文に共鳴する。その歩みは確かに黙々としたものであり、それは夫、相馬愛蔵が言うところの「素人としての自分の創意で、何處までも石橋を叩いて渡る流儀であり、また商人はかくあるべしと自ら信ずる所を実行したまで(相馬愛蔵『一商人として』岩波書店、一九三八年、一〇二頁)」という理念と姿勢を共有しながら夫婦で歩んだ一本の道であつた。

したがって、「新宿中村屋」を興した企業家としては、相馬愛蔵と黒光という二人を取り上げてしかるべきであるが、本稿ではあえて、近代日本を彩る人物として、黒光に焦点を当てて論じてみたい。それは後述するように、黒光という「光」が照らしたものは、ただ一つの企業の歩む道というだけでなく、この時代に生みだされようとしていた新しい生き方や価値観、芸術、文学、社会事業までも包括するような広がりを持つ、まさに「近代という激動の時代」そのものであつたように思われるからである。

黒光の「大志」と「真心」——アンビシャス・ガールからパン屋の女将へ

信州安曇野穂高から出て早稲田大学で学び、帰郷して実家の養蚕業に専念していた相馬愛蔵と、仙台で士族の家に生まれ、好奇心と向学心が人一倍強く、宮城女学校、フェリス女学院、明治女学院に学び、深い教養と文学的素養を磨き続けた星良(黒光の本名)が、キリスト教を通じて知り合った恩師の媒酌で夫婦となつたのは、一八九七(明治三〇)年、愛蔵二十八歳、黒光二十二歳の時であつた。「アンビシャス・ガール」と呼ばれるほど夢多き学生であり、「才鋒をつつめ」という意味で恩師巖本善治から「黒光」というペンネームを授けられた才女は(島本久恵『俚譜薈薇来歌』筑摩書房、一九八三年)、結婚を機に作家になる夢を棄て、田園生活に理想を求めて信州に嫁した。そして子供を授かり、愛蔵とともに農業と養蚕に勤しんだ。しかし、理想と現実の間で苦しみ自身の不調に陥つたため、夫婦で再び上京することにした。そして本郷に家を借り、独立独歩、新たな生活を支えるために、見よう見まねで新しい商売すなわち「パン屋」を開業したのである。場所は東大正門前、時は一九〇一(明治三四)年、二月三〇日のことであつた。

二人とも書生上りの素人という自覚から、「冒険のやうには見えても、西洋にあつて日本にまだない商売か、或ひは近年やうやく行はれて来たが、まだ新しく誰が行つても先づ同じ

こと、素人玄人の開きの少いといふ性質のものを選ぶのが、まだしもよささうであった(『一商人として』九頁)と慎重に検討した結果の開業であった。『営業が相当目鼻のつくまで衣服は新調せぬこと。食事は主人も店員女中達も同じものを摂ること。将来どのやうなことがあつても、米相場や株には手を出さぬこと。原料の仕入は現金取引のこと。最初の三年間は親子三人の生活費を月五十円と定めて、これを別途収入に仰ぐこと。その方法としては、郷里に於ける養蚕を継続し、その収益から支出すること。』(『一商人として』一五〜一六頁)を五ヶ条の盟として、二人は中村屋という夫婦舟で、近代という大海に漕ぎだしたのである。

周囲の驚きと心配をよそに、店はとにかく忙しく、繁盛した。黒光は傍らに幼子を寝かせながら、頭を櫛巻にして木綿の筒袖を着、台所脇の猫の額ほどの小さな製造所で「ワップル」を焼いていた。またある夕方は、裏長屋の井戸端で明日の米を洗い、手桶に水をいっぱい汲み込んで、お勝手の木戸を締める時、頭の上に鎌のような銀色の新月を仰いだ。その風流は彼女にとってまたなく嬉しいものであつたという。

こうした黒光自身の筆が生き生きと語る、創業期の苦労とそれを乗り越えていく達成感。パン屋の女将としての日々の暮らしのささやかな幸せを知る時、彼女はじつは「大志」を棄てたのではなく、新たな「大志」を得て、次なる舞台へと飛躍したのだと諒解される。情熱を傾けた文学やキリスト教という信念を通して得た豊かな感性は、おそらく彼女の内面に深い「真心」を育む土壌となつた。中村屋が取り組んだ数々の新規事業の立ち上げに伴うリスクや不安をことごとく「希望」に変えることができたのは、紛れもなく彼女の「大志」と「真心」であつたのだと思われ。

例えば、中村屋がどうして繁盛しているのか、と問われ、黒光は次のように答えている。「ただおのずとしたり結ぶ機縁により、ただその縁に従うて力一杯の努力をいたしますうちに、不知不識ここに至つたものであります。その機会というやうなもの、いつも初めは一つの危機として来るか、あるいは一つの負担として現れました(『黙移』一八九頁)。「危機」や「負担」を「機縁」や「機会」と信じて前に進む彼女の生き方そのものは、この後も幾度となく中村屋の企業活動の方向性を定めることになつた。

黙移の道で出会つた

「忘れえぬ人びと」

中村屋の逸品に込められた物語

中村屋は一九〇七(明治四〇)年に支店を新宿に設けた。二年後には本店を新宿とし、製造所の拡大と経営の多角化に着手した。同年には和菓子、一九二〇年には洋菓子、翌年からロシアパン、一九二七年には純印度式カリ、月餅、中華まんという代表的な三商品が加わるとともに喫茶部を開設し、レストラン事業も開始した。途中、一九二三年に株式会社を改組し、中村屋は一商店から企業へと成長を遂げた。

黙移の道は静かで凛としているが、しかしそれは、言葉に尽くせない情熱、葛藤、慟哭、歓喜、愛情が次々と交錯しながら往來する道でもあつた。その往來がもたらした一つ一つの「出会いの物語」が中村屋を代表する商品へと結実し、それが、中村屋という老舗企業を支える唯一無二の財産になつていったことはじつに興味深い。

純印度式カリは一九一五(大正四)年にインドの独立運動家ラス・ビハリ・ボースを一家協力して保護したことがきっかけで生まれた。後に娘(俊子)と結婚したボースは名実ともに中村屋の家族となつた。ロシア文学に造詣が深かつた黒光が盲目のロシア詩人を困つた時にはロシアの衣食住に新たな興味を持つたという。彼がいつも着ていたルパシカを中村屋の制服とし、ボルシチを喫茶部のメニューに加えたのはこうした経緯からであつた。他にもギリシア系亡命ロシア人の職人を受け入れたことがロシアパンに、トラピスト修道院を追われた人を受け入れたことが調布の仙川に中村牧場を開きつつかけとなり、ロシアから来た菓子職人や中国人に請われて雇い入れたことがロシアチョコレート、月餅、中華まんへと結実したものである。黒光が言うように「いちいちみな不思議な縁(『黙移』一九六頁)」なのであつた。

創業一八年目を迎える二〇一九年現在、資本金約七億七〇〇〇万円、売上高(連結)四一三億五八〇〇万円、事業所は関東に五工場、研究開発室、全国に七営業所という体制である。「己の生業を通じて、文化・国家(社会)に貢献する」という創業の精神は、現在「新たな価値を創造し、健康で豊かな生活の実現

に貢献する」という経営理念へと引き継がれている(長峰一真「企業史料が企業経営に果たしてきた役割―中村屋の事例から」『企業と史料第九集』二〇一四年)。

黒光が照らしたもの―

企業・文学・芸術・女性・社会事業の交差点

黒光を「光」に例えるならば、彼女が照らしたものはただ商売の道にとどまらなかつた。店員を「家族」とし、国内外から中村屋を頼つて訪れる人びとを「客人」として迎える姿勢は一貫しており、そうした理念からすれば、数多の芸術家たちとの交流から「中村屋サロン」が誕生したのは、ごく自然の流れであつたのだと理解される。

中村屋はまさに、あらゆる者の往來を拒まない交差点であつた。日本とインドとロシアと中国、店主と店員、商業と文学と芸術、為政者と流浪の人びと、男性と女性。その間にある矛盾と葛藤を「大志」と「真心」という光で照らす時、企業はかくも懐深いものかと感嘆させられる。黒光の人生を通してこそ見えてくるのは、その人生が企業・文学・芸術・女性・社会事業を包摂し、結び付け、それらの交差点から新しい価値が生み出されてきたという歴史である。企業家の生き方やその信条が社会に及ぼす影響の大きさについては、現代にこそ再考される必要があると思われ。

先日、私は黒光との三度目の出会いを果たした。

信州穂高の礫山美術館に足を運び、荻原礫山の絶作、黒光がその心象であるといわれる彫刻「女」と、ようやく向き合うことができたのである。一人の輝ける企業家として黒光という女性に出会い直した今、彫刻「女」が投げかけるその視線の先に、彼女はいったい何をしようとしていたのかと思いを馳せた。かつて私はこの作品を彼女の個人的な苦悶を表現したものと考えていた。しかし黒光が生きた時代と新宿中村屋の足跡を辿り、筆をおくにあたって今思うのは、彼女一人が背負うには荷が勝ちすぎる、つまり、激動の近代日本が孕む複雑で重すぎる苦悶を背負いてなお、視線のその先に、黒光はやはり確かな希望の光を見ようとしていたのではなかつたかと、そう思うずにはいられないのである。

山 の 逸品

山が多く森林に恵まれ、
周囲を海に囲まれるこの国で
自然、ひと、環境という
地域の資産を活かしながら
時代を超えたものづくりが息づく。

養殖真珠 長崎県対馬市

日本の真珠産業は1893(明治26)年、
御木本幸吉が世界で初めて真円真珠の
養殖法を発明した時が出発点である。
現在の主要な生産県は上位から愛媛、長崎、三重で、
国内生産の9割を占める。
長崎県に属する九州最北端の島、対馬は
一般にはあまり知られていないが、
日本を代表する養殖真珠の一大生産地であり、
品評会で最高賞を何度も受賞。
「対馬真珠」として高い評価を得ている。

写真提供 / 対馬真珠養殖漁業協同組合

切り出し七輪 石川県珠洲市

食品を加熱するだけならガス火があり、
炎すらない「レンチン」ですむ時代に売れている
七輪があるという。
奥能登でしかつくれないという希少性と
人の手で山から切り出し、
一つひとつ削り出してゆくストーリー、
どこにも真似のできない、
接ぎが一切ない用の美を表わすフォルム。
そのどれもが、まさに地場の産業の命である。

写真提供 / 能登燃焼器工業株式会社

宮古上布 沖縄県宮古島市

琉球王府に貢納されていた織物は、
その美しさと技術の高さから
やがて沖縄の支配者となった薩摩藩や
江戸幕府への献上品として用いられるようになる。
島の女性たちは、自分たちが着ることのない織物を
年貢として織り続ける中で、
技能をさらに磨いた。
1975(昭和50)年、国の伝統的工芸品に指定。
現在では約70名の組合員が
島の手仕事を守り続けている。

写真提供 / 宮古織物事業協同組合





四季の変化が輝きを生み出す対馬の真珠

対馬の真珠養殖は、御木本幸吉とともに真珠養殖に携わっていた北村幸一郎が養殖場を開設したことに始まる。対馬を選んだ理由は、天然のアコヤ貝が生息していたことに加え、三重県と緯度が近く、浅茅湾の穏やかな海が養殖に適していたためと考えられる。

真珠の生産はプロセスごとの分業が基本であるが、対馬真珠養殖漁業協同組合の代表理事組合長、日高肇さんによれば「対馬は浅茅湾で稚貝を育成し、自分たちで母貝に育て、真珠を生産します」。この方式は真珠の品質にも表れるという。「対馬は貧栄養素の海と言われます。対馬の海は



ブルーですが、愛媛や三重の海は餌のプランクトンが多いので緑色です。餌の多い海で生まれた稚貝を対馬に持ってくる、環境に馴染むまでに時間を要するが、生まれた対馬の海で育てば、環境変化による負荷は少なくなります。餌が少ない分、時間をかけて貝を育てます」。組合の参事、川上街子さんが続ける。「温暖なところで育った木は成長が早く、年輪の幅が広い。ゆっくり育った木は年輪が細かく、その分密度が高い。対馬の真珠は年輪の密度が濃い木だと考えてもらうとわかりやすいでしょうか」。「堅く巻くのが対馬の真珠です。四季がある海で身が締まる、太る、締まるを繰り返しながら育っていく。これがないと光沢のあるきれいな真珠はできないのです」(日高さん)。

浅茅湾に行くと、養殖筏が整然と並んでいる。「これは沖出しと言い、筏に吊るしたカゴの中で真珠を育てているところです」。湾上では別の事業者が作業をしている。「貝を洗っているところです。フジツボなどが付着すると貝がストレスで死んでしまうので、10〜15日に一度の割合で貝を洗うのです」。貝の世話に手間暇をかけていることに驚くが、考えてみればアコヤ貝も生き物であるわけで、貝もストレスなく育つ環境が必要である。



浅茅湾の奥にある日高真珠養殖場では、核入れをしている人や沖出しをするために多くの人がさまざまな作業を行っている。機械を操作していた日高和昭さんに何をしているのか尋ねると「核入れた貝が良好に育っているかどうかをX線でチェックしています。ダメな貝を取り除き、いい状態の貝だけを沖出しするためです」と説明してくれた。

対馬の真珠は、2019年も全国真珠品評会で最高賞を受賞した。対馬の海と一貫生産にこだわる事業者たちが、とびきりの真珠を生み出している。

DATA

対馬は沖縄本島と北方四島を除くと日本で3番目に大きな島で、周囲に100以上の島があり全体を含めて対馬列島または対馬諸島と呼ぶ。博多までは航路で132km、韓国までは直線距離で50kmに位置し「国境の島」と呼ばれる。古くから防人(さきもり)の島として、また朝鮮半島との交易の拠点として、歴史の中で重要な役割を果たしてきた。

職人が「つつひとつ」「まなぐ」、切り出し七輪

珠洲市の七輪は珪藻土けいそうどでできている。珪藻土とは、水中で繁殖する藻の一種である植物プランクトンが堆積して化石となったものである。主な産地は北海道、岡山県、大分県、鹿児島県、石川県だが、珠洲市産業振興課によれば「珠洲市周辺における埋蔵量は全国屈指であり、良質です。国内外のほとんどの産地が重機を使って露天掘りをし、粉碎した珪藻土を型に入れて成型してしており、『切り出し七輪』ができるのはおそらく珠洲だけでしょう」とのことだ。

取材をした能登燃焼器工業株式会社は、珪藻土の山に取り囲まれるように社屋があり、切り出しから仕上げまで一貫して行っている。4代目の舟場慎一さんに坑道を案内していただいた。「坑道内は年間通して15℃ぐらい。珪藻土の中に含まれる水分を排出するために入り口を低くし、上へ上へと手掘りで進んでいきます。この坑道は比較的新しいのでそんなに深くはないのですが、以前の坑道は10kmほどありましたよ」。坑道の突き当たりには到着すると、職人さんが作業を行っていた。真正面の珪藻土の壁面に線を引き、鉄砲鑿くわを突き立てて溝を切る。そこに楔を打ち込むと、塊がゴロっと切り出される仕組みだ。ここで切り出した珪藻土は加工場に運ばれる。

「丸い形のものには電動の回転刃を使いますが、四角いものは今でも職人が鑿を使う手作業です」(舟場さん)。目見当で定めた位置に鑿がスーッと真っ直ぐに入っていく。エッジの美しさにほれほれする。仕事の様子をいくらでも眺めてい

られる。「削って成型することを、私たちは「まなぐ」と言います。独特の用語ですね。私は18歳の時から始めてもう50年やっています」と話してくれたのは3代目の舟場和夫さんだ。

息子の慎一さんによれば、この地域では人々が自家用のため、近くの山から切り出して七輪やかまどをつくっていたそうである。それが徐々に販売するようになり、産地化した。

価格の面では外国製の輸入品に太刀打ちできないが、飲食店やアウトドア用の需要も一定数あるという。さらに「最近では海外から日本の本物が欲しいと言われます。アメリカのバーベキューのように火柱が上がっている中で肉を焦がし焼きにするのとは違う、炭で炙る焼き方が欧米で注目されているようです」。生活必需品から、食文化を楽しむつらえへと移行する中で、消費者も職人が「つつひとつ」「まなぐ」をつくる七輪に価値を見出しているのである。



DATA

七輪は、軽量で小さく扱いやすいため経済的な燃焼器具として、囲炉裏やかまどを持たない町民長屋を中心に普及したと考えられる。昭和30年代頃まで、都市部の多くの家庭で調理器具として広く使われていたが、ガスや電気の普及とともに家庭から姿を消していった。七輪の語源については、六が7個あったからとか、価格が7厘だったからなど、諸説ある。



至高の織物、宮古上布



着物好きがいつかは着てみたいと憧れる宮古上布。口ウを引いたような光沢と透明感のある薄さが織りなす美しさは、麻織物の最高峰とされる。600年の技を守り、伝えているのが宮古織物事業協同組合である。「原材料の調達や藍染めは組合で一括して行い、生産した織物をここで品質検査をしてから市場に出しています」と話してくれたのは専務理事の神里佐千子さん。芋麻ちまを育て、糸を績つむむ。図柄に沿って紺くろを括くくって琉球藍で染める。精緻な織りと

仕上げの砧きね打ちまで、緻密で根気のいる工程だ。藍染めを行っていた下里愛子さんに話を伺った。下里さんは20代の時に宮古上布の後継者育成募集を知り、親の反対を押し切ってこの世界に飛び込んだ。子育てのために一度離れ、50歳で復帰し、今は藍染めを担っている。「琉球藍や混ぜる蓼藍の状態、発酵それぞれが天気や湿度、場所などちよつとした違いで染めが大きく変わってしまう。やってもやっても、これで良いというのはなく、藍染めは本当にむずかしいです」。

織りも極細の糸で細密な文様を織っていくものであり、熟練した職人でも1日20センチほどしか織り上がらない。宮古上布は、琉球国王による夫への厚遇を喜んだ妻の稲石が織物を王に献上したのが始まりとされる。その後、人頭税社会において、女性は年貢の粟の代わりに貢納布として上布を納めることが義務付けられた。「糸をつくる部屋や織る部屋があり、役人の見張りのもと織っていたそうです。良い織物が求められ、検査が通らない上布を織ろうものなら家族にまで影響が及ぶような罰則がありました。逆に言うと、そのような厳しさがあったから技術が磨かれ、伝えられてきたのだと思います(神里さん)」。

宮古上布の織りの技術だけでなく、原材料の芋麻の研究や糸をつくる人の支援も行っている組合では、織る職人たちの収入を安定させるべく奔走している。何か月もかけてつくる労働力に見合わない賃金であり、技術を学んでも離れざるを得ないのが現実なのだそう。その結果、宮古上布としての規格を通る反物が年間で10反を切っている。宮古上布を求める人が多い一方で、注文を受けても反物を納品できるまでに2、3年はかかってしまう。限界まで極めつくした織物ゆえの課題なのかもしれない。



DATA

沖縄本島から南西へ約300km、飛行機で1時間弱。宮古島は、6島からなる宮古諸島の一つでも大きい。島は温暖で地形は平坦、世界的に珍しい地下ダムを備える。県下1位の生産量を誇るさとうきびを始め農業が盛んな一方で、国際空港の誕生やリゾートホテルの進出により観光化が急速に進み、観光バブルに沸く。

Road to muse+

作家・三島由紀夫が遺したこと

TDB・OB調査員が伝えるエピソード

現場を知らない者は役に立たない

そのとき、僕はまだ二十歳だった。

仲間とツーリングの途中、信州・松本で衝撃的なニュースを耳にした。

1970年11月25日、ノーベル文学賞の候補にもなった世界的な作家・三島由紀夫が、

陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地東部方面総監部(当時)に立てこもったのだ。

楯の会の隊員とともに蹶起したという。最初、思わず噴き出した。

直後、割腹自殺したと聞き、急にシュンとなり、沈黙の輪が広がった。

今年三島が亡くなって49年目、令和最初の憂国忌である。

かつて帝国興信所(帝国データバンクの前身、略称TDB)と

三島由紀夫との奇遇を証言した調査員がいた。二人のOBが語ったエピソードが残っている。(敬称略)



自決3か月前にTDB調査部を訪問 遺作『豊饒の海』最終巻「天人五衰」の取材で

珍しい来訪者一、文壇の鬼才といわれた三島由紀夫氏…、昭和45(1970)年8月に、氏が新富町の帝興に来社。小生がお会いし、対談した。主目的は氏の遺作『豊饒の海』4部作の最終巻『天人五衰』に主人公の身元調査(小説上)が必要となり、調査のノウハウや報告書の要項などを知りたいとのことだった。自衛隊の覚醒を促し、市ヶ谷で自決される3か月前であったが、何の変わりもなく平然としておられた。

こう書き残したのは、元TDBの人事調査第一部長、藤澤宗治である。三島が亡くなって25年後の1995年、『帝国データバンク創業百周年記念誌』を編集中で知って、よこした手紙にそうあった。すぐに連絡を取り、直接、話を聞いたときの録音の書き起しメモも残っている。

「三島さんが新潮社の女性編集者と一緒に来られたときのことはよく覚えています。ええ、青山に本社を移転する前でござりました」

藤澤は喜寿を前にして、その記憶は鮮明であった。

「あらかじめ終業の午後4時半に会う約束をしていたのですが、その時刻に一分一秒違わぬ正確さで来られたのにはびっくりしました。几帳面な人柄は聞き及んでいましたが、名刀のように切れ味の良い義理堅さでした」

このとき三島に同行した文芸誌『新潮』の担当編集者・小島千加子へのヒヤ



藤澤 宗治さん

リングの記録も残っている。小島は現役編集者の頃の回想集『三島由紀夫と檀一雄』(構想社、1980年)など著書多数がある。

「私が当時新富町にあった帝国興信所の本社を三島さんと訪ねたのは、9月初めに出る『新潮』10月号の締切日に原稿を受け取った翌日のことですから確かに8月25日でした」

小島は事前に藤澤を訪ね、趣旨を説明し、後日改めて三島に同行している。そのときちょっとした事件があった。

当然のことなのだが、三島は小島が新潮社から真っ直ぐハイヤーで迎えに来て、そのままTDB本社に行くものと思っていた。ところが小島は、その日の午前中に作家・高橋和己あるいは独文学者・高橋義孝との打ち合わせが延びてしまい、会社に戻ってからハイヤーで大田区馬込の三島宅に向かうのでは約束の時間に間に合なくなる。そのために小島は出先から直行し、大森駅でタクシーをつかまえて新富町に行くことにしたという。

「しかし、あいにく車がなかなかつかまえず、手間取ってしまい、三島さん是不機嫌になられました。『きみのところは独立採算制ではあるまいし、ケチだねえ』って。いまさら弁解したところでどうしようもないので、ひたすら恐縮するばかりでした」

不愉快そうな三島だったが、目的地に着き、TDB本社の建物を眼のあたりにすると、三島は早々にベンを走らせながら含み笑いをしてこう言ったという。

「興信所を調べる男っていうの、どう? ちょっといいね、気に入ったよ」

三島の機嫌はいつの間にか直り、そう悦に入って玄関をくぐったのである。



小島 千加子さん

自分で調べて、確かめ、感じて、理解する 三島の現場主義とTDBの現地現認主義

藤澤は二人を当時新富町にあったTDB本社玄関の突き当りの応接室に案内した。青山に本社移転する直前で掃除も行き届かず、もちろんエアコンなど空調設備もない。室内は蒸し暑く、扇風機が送る風も生ぬるく、かえって気持ちが悪かったが、三島は一向に気にするでもなく、「僕はだいたいこうした古めかしい煉瓦造りの建物の雰囲気が好きでね」と屈託がなかったという。

では、実際の取材はどうだったのか。藤澤が語っている。

とても和やかでした。笑い声も出たりする、にこやかな雰囲気でした。私が説明することにじっと耳を傾け、報告書の書式を見ながら丹念に、すばやくノートをとっていました。三島さんは、内容はマル秘でしょうから読みませんと言って、もっぱら調査項目と記載方法を見ておられました。三島さん本人はあまり質問しませんが、話せば早口で、とにかく回転が速い。説明はどんどん進行していきました。

藤澤は「報告書のスタイルにあまりこだわる必要はないでしょう」とも言ったようだが、「やはり現実的な感じを持たせるにはきちんとしておかないといけない」と三島は答えている。三島の性格の一端が窺われる話である。

最近、中途半端な研究員や学芸員は、何もかもインターネットで資料や論文を探し出し、それを器用にまとめてレポートするだけで、自分で汗を流し、自分の“ことば”と“足”で書かなくなった。上手に、要領よく何かを作ることと、何かをクリエイトすることの間には大きな違いがあるはずだ。

三島の担当編集者であった小島もこう述懐している。

考えてみれば、三島さん自身が特に時間を割いて報告書の様式や書式を調べる必要はないんですよ。編集者に、あそこに行けば資料があるはずだから、と調べさせればそれで済むわけですからね。小説の中で調査員が動くのかと思っていたのですが、原稿を見たら全くそういうことはないのですから。

TDBには創業以来120年、その行動指針のひとつに「現地現認」がある。いかなるときでも、いかなる事情があろうとも、常に現地、現場、現物にこだわり、自らの五感を駆使して事実肉薄するのが調査の要諦とされている。藤澤も三島の“現場”“本物”へのこだわりが、TDBの「現地現認」主義と重なって見えると言っている。大胆に敷衍すれば、「デスクにしがみつき、現場を知らないまま、知ったかぶりをしても、それはいつかは破綻する」「現場に出て経験を積んでない者は何の役に立たない」と語っているようにも聞こえた。

三島由紀夫とのもうひとつの出会い 調査を依頼され、調査の対象にも

当社と三島との接点は、実は遺作『豊饒の海』の取材協力だけではなかった。証言者は、人事調査第二部副部長だった上野静である。

上野は、入社して2、3年たった頃、三島から調査を依頼されたために、目黒区緑が丘に住んでいた本人を訪ねたという。三島はまだ独身であった。三島が画家・杉山寧の長女瑤子と結婚したのは1958(昭和33)年。上野の入社が54年だから、三島を訪ねたのは56年から57年頃のことと思われる。三島は「実は依頼主は私ではない。友人に

頼まれたのだ。帝国興信所の歴史と実績を評価して調査を依頼することにした」と趣旨を告げた。

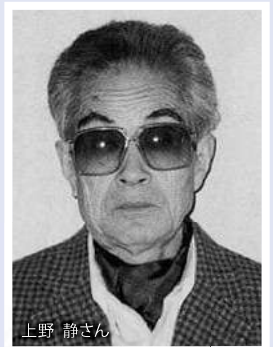
上野が書き残している。

ひと通り用件が済むと三島は調査業務について、膝を乗り出し、機関銃のように質問を連発した。その知識欲の旺盛なことには舌を巻くほどだった。後年、三島が自決3か月前に当社を取材で訪れたのもその時の記憶が片隅に残っていたからではないだろうか。

そしてこれも偶然なのだが、上野が三島から調査を頼まれて数か月後、今度は逆に三島自身の信用調査が入り、上野が担当することになった。三島の本名「平岡公威」への調査である。

すでに三島は一派を成す文壇の花形である。私は、そんな三島に迫る絶好の機会と胸を躍らせ、調査員の腕の見せどころと張り切って調査に着手した。結果はどうだったか。行動範囲が広く、資料収集には苦勞させられたが、もちろん全く問題はなかった。清貧で品行方正な生活ぶりが実証された。

藤澤は退職後、三島に対応した時の体験をまとめた。同人誌『砂』に寄稿した「三島由紀夫の回想(上)(下)」(1973年10、11月号)である。自身の体験談だけでなく、藤澤なりの三島論を展開している。上野も三島の死後、1971年7月、当時のTDB社内報『新樹』に三島の思い出をつづり、また90(平成2)年には『早稲田学報』創刊一千号記念誌に三島との出会いについて寄稿している。



上野 静さん

藤澤がそうであったように、上野もまた三島の死に大きな衝撃を受けた。藤澤が三島の忌日が近づくと必ず『豊饒の海』4部作のうちのどれかを書棚から取り出し、数章を読むことをならいにしているように、上野も改めて三島作品を読み返していると語っている。藤澤にせよ、上野にせよ、三島との出会いはそれだけ鮮明な体験として記憶の底に生涯深く刻まれることとなった。

教科書や報告書は、往々にして歴史の大きな流れにしか焦点を合わせない。しかし、そこからこぼれ落ちたエピソードが光を放つことは多い。藤澤や上野に限らない。TDBの調査員は、皆、同じような現場体験があり、それは一種の“秘話”として語り継がれているのである。



藤澤、上野両OBによる
三島事件回想資料と、
三島が訪ねた新富町の日本社建物

(帝国データバンク史料館館長 高津隆)



帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

- [入館料] 無料
[開館時間] 10:00～16:30 (入館は16:00まで)
[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始
(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

- [JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分
中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分
[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分
丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際は館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し付けください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp